

国士館を支えた人々

大場 信續



大場信續

現在、私立大学の多くは、一般向け講座の開講や図書館を開放するなど地域住民との結びつきを積極的に図っている。目指すは地域に根差した、地域に愛される学校でありたいということ。総じて、地域に対して何らかの

浪江 健雄



役に立ちたいといったところであろうか。しかしながら、その地域住民の特性に合わせた教育を提供する、すなわち地域住民のための学校を創るということになると話は別である。それは、学校側と地域住民側との密なる協力体制が整ってこそ初めて実現するものであるゆえ、現実的には容易いものではない。しかるにそうした学校が、一九二六（大正一五）年四月、世田谷の地に創設された。国士館商業学校がそれである。そして初代校長に就任したのが大場信續（おおばのぶつぐ）であった。

本稿では、国士館商業学校で初代校長を務め、学校側と地域住民との協力体制を構築し、学校運営に手腕を揮った大場信續の実像と、国士館商業学校の成り立ちに迫ってみたい。

まずは、大場信續が国士館商業学校長になるまでの生

い立ちを、『大場家歴史 続』(大場家歴史編集委員会、一九八四年)に拠ってみていくこととする。

信續は、一八七九(明治一二)年一月四日、東京府荏原郡世田谷村二三六番地(現東京都世田谷区世田谷一丁目二九番一八号)に、父信愛、母以佐の長男として生まれた。大場家は、江戸時代、近江彦根藩世田谷領の代官を務めた家柄であり、数えて一四代であった。

ここで大場家の由緒についてみておきたい。世田谷の地は、江戸時代初期の一六三三(寛永一〇)年に、近江彦根藩の飛び地領(二三〇〇石)とされた。その理由は、当時の藩主井伊直孝が幕府の要職を務めており、そうした者へは便宜上江戸近くにも所領が与えられる慣例からであった。その後、江戸時代を通して世田谷は井伊家が領していた。ちなみに、世田谷の豪徳寺は、一六三三年に直孝が井伊家の菩提寺として伽藍を創建し整備した。寺号は直孝の戒名である「久昌院殿豪徳天英居士」による。こうして世田谷を治めることとなったものの、藩主自らが治めることは困難であったため、代役として代官がたてられた。その代官に任じられたのが大場家であった。大場家は江戸時代以前より在地しており、戦国期には小田原北条氏傘下の吉良氏に仕えていた。ところが、北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされ、吉良氏も

滅亡すると、野に下って帰農していた。しかし、世田谷の地が彦根藩領となった際、井伊家より召しだされ、武士身分に戻され、以後、明治維新に至るまで世田谷の地を治めることとなった。江戸時代の郡代および代官は広域支配をあずかることもあったが、世田谷領は極めて小規模であったこともあり、農民との接点が近く、代官所の掃除人足・風呂番・障子張替などの雑用は、役人ではなく領内の農民があたった。こうしたことから農民の実情も察しやすく、また、歴代の当主たちも自らを律し、農民からも尊敬の念を得られるよう努めていたことが、『大場家家督心得』はじめ歴代代官が伝えた家訓などから読み取れる。

一八八三(明治一六)年、四歳となった信續は、世田谷村経堂在家村連合村立桜小学校に入学した。これは村の子供より二年早く、当時散見される例とはいえ、信續にそれだけの能力があつてのことだろう。第二学年からは赤坂小学校に移り、赤坂小学校高等科を卒業後、東京府立尋常中学校(現日比谷高等学校)、第一高等学校(現東京大学教養学部)へと進学した。五歳で小学校へ上がつてからの信續は、今も昔も困難なこのコースを順調に進んでいった。

このように順風満帆であつた信續に、第一高等学校在

学中の一八九九（明治三二）年、不幸が襲う。父信愛が亡くなったのである。信續は物心のつく頃から、父から上に立つ者としての薫陶を受けた。また、母や祖母からも歴代代官が伝えた家訓によって厳しく躰けられていた。したがって、ゆくゆくは第一四代を継ぐ心構えは出来ていたものの、直ちに父の跡を継ぎ、当主としての義務と責任を負って立たねばならなかった。

信續が戸主になった当時、大場家の主な収入源は、小作料を中心とする農業収入であったが、大きな所帯にはそれなりに出費も多い。そのうえ借金も背負っていた。しかしそのために先祖伝来の土地はたとえ僅かでも手放すことはしなかった。当時はまだ山林がかなりあったので、松や杉などを切り出して売り、借金返済に充て、急場を凌いでいった。

一九〇〇（明治三三）年四月、信續は第一高等学校から東京帝国大学農科大学（現東京大学農学部）農学科に進んだ。法科や工科ではなく、あえて農学科を選んだのは、父信愛の意志を継いで世田谷農家の指導者となり、村人と共に生きる覚悟からであろうか。

在学中の一九〇三（明治三六）年二月には結婚もしている。生涯の伴侶となったのは、神奈川県高津村上作延（現川崎市高津区上作延）の地主、三田正綱の長女琴子

である。信續二四歳、琴子一八歳であった。生涯を通して仲睦まじい夫婦であったという。また、同年七月にはめでたく東京帝国大学農科大学農学科を卒業するも、同年の日露開戦によって、一年志願兵に召集。近衛野砲兵聯隊留守隊にあって日露戦役勤務に服したが、戦争の終息に伴って召集解除となった。

除隊後は想うところあつてか、再び学徒となった。学校は同じ東京帝国大学農科大学だったが、今度はそこに新しく設けられた耕地整理講習、後の農学部農業土木科の第一回生になったのである。在学期間はわずか一か年であったが、この再就学がきっかけとなり、以後、耕地整理ないし区画整理の先駆けとして活躍していくことになる。

このように率先意欲に燃え、次から次へと新しい学問と知識を身につけていくと、同時に村の青年たちのことも思いやられた。彼らのほとんどは貧しいがゆえ上級学校へ行けずにいるわけだが、何とかして彼らにも勉強の場を与えてやりたいと考えていたという。その手始めとして行ったのが、一九〇六（明治三九）年の夜間補習学校の開校であった。これは世田谷村の知識人として知られていた実相院の和尚佐々木義宣の協力も得て、とりあえず桜小学校の教室を借りて、週三日行った。元より産

業、農業実務教育が中心だったが、その他の学科も教えて、実業学校卒業に準ずる学力をつけさせようと努めた。この夜学は、一九一一年（明治四四）年に、世田谷村立桜農商補習学校が正式に発足するまで続いた。こうした信續の青年たちへの温かな眼差しが、後の国士館商業学校設立へと繋がっていったのである。

一九〇八年（明治四一）年一〇月、信續は大学の教授や先輩の推薦によって農商務省に入り、農商務技師に任じられた。当時は農業の合理化と増産のための耕地整理が国の急務であった。したがって、信續の仕事は、政府の命令に従い、都道府県庁へ出張して講習会を開き、または現場に臨んで実地指導をし、耕地整理の専門家を増やすことであった。その後、一九一三年（大正二）年四月には宮内省林野局に栄転する。またその一方、当局の了解を得て、地元には原郡第一土地区画整理組合を創設、組合長に就任し、一九二四年（大正一三）年一〇月、組合設立の認可を受けた。早速全国に先駆け、現在の世田谷一、二、三、四丁目及び弦巻二、三丁目、若林、赤堤、上馬の一部にわたる地域の大規模な区画整理に着手した。この組合は多方面から注目をされたが、とくに全国に先駆けてメートル法を採用したことで脚光を浴びた。この整理事業の計画は、一九二一年（大正一〇）年四月のメー

ル法採用後早々のもので、一間をメートルに直した単位ではない純メートル単位など、今日でも十分に普及されているとはいえないものである。

一方で信續は、一九二〇年（大正九）年一二月に、相原永吉世田谷村長をはじめ、有志と図り、世田谷村の地主一六〇人の連署を添付した勝光院西線敷設に関する「電車線路延長願」を玉川電気鉄道株式会社に提出するなど率先して事に当たった。勝光院西線とは、現在の下高井戸から三軒茶屋までの東急世田谷線のことである。

また、一九二一年二月、一部には相談もしていた産業組合法による有限責任世田谷信用販売購買組合の設立案を発表した。信續は宮内省林野局に奉職していたが、公共事業のことであったので快諾された。また、地元有志からも是非にとの声が高かった。古くからの慣習で、信續の代になっても大場家へ金を借りに来る地元民が絶えず、その上永い間続いた惰性で、期日が来ても双方何もしないで放置しているのが、借金は増えるばかりという状態であった。そこで今後は一切組合を通しての貸借にしてその悪習を断ちたい、というのが見かねた有志たちの希望であったという。

また、時代の趨勢に眼を転ずると、大正末期の世田谷地域は、関東大震災以降、郊外への私鉄開通も相ま

て、従来の農耕地は住宅となり商家も増え、急速に市街地化が進んだ。そうした状況の中、地域では商業教育の必要性が高まりつつあった。

こうしたなか信續は、一九二四年、官界を去る決断をした。すなわち、これからは一介の民間人として地域の発展のために全てを捧げる覚悟を示すものであった。それまでも地域の発展に尽くすべく、官職では世田谷地域の区画整理に尽力し、その傍ら電車線路延長運動、そして地域経済発展の基盤となった世田谷信用販売購買組合の創設も実現させた。このように信續の関心は地域の問題全般にわたっていたが、純民間人となって最初に手掛けたものは教育事業であった。元来信續は、向学心の厚い青年に対して、進んで手を差し伸べ、引き上げてやる援助を惜しまなかった。書生として大場家に住み込ませ、学校に通わせるなど、信續の庇護、引き立てを蒙った青年は枚挙に暇がない。

こうしたなか国士館では、一九二五（大正一四）年三月三十一日、中学校令に基づく認可申請を行い、同年四月八日に設置認可を受け、国士館中学校を創設した。また、新築の中学校校舎などの施設を公共的に活用したいと考え、世田谷地域の青少年のための無償活用を提言する。これを受けた世田谷町長山崎四六の斡旋により、

一九二五年四月に農商補習夜間塾が開校された。ここで塾長に推されたのが信續であった。入学者数は二〇余名で、普通学と農業大意が講義された。前者を国士館の教員が分担し、後者は信續が担当した。

開講から約一年後、荏原郡長宮城栄三郎、目黒町長土生文之助などを中心に「組織ある中等程度の商業学校」の設立が希望され、世田谷町・駒沢町・松沢村・玉川村・目黒町・碑衾町の「荏原郡西部六か町村」と国士館の協議により商業学校の創設が図られた。やがて、学校の経営主体・財政負担は六か町村とし、校長を大場信續とすること、独立経営が不可能になった場合は国士館が経営の任にあたること、学校名を国士館商業学校とすること、国士館の校舎・施設を利用することなどが決定した。これを受けて、一九二六年二月五日に「実業学校令」に基づく認可申請を行い、同年三月四日に設置認可を受け、国士館商業学校が創設された。

以上の経緯を以て信續は国士館商業学校の校長に就任することになったのだが、当初から国士館を理解し、進んで校長の任に就いたわけではなかった。実のところ、初めはかなりいぶかしんでいたことが、信續が『国士館々報』二巻三号（一九二六年四月一日）に寄稿した「私が国士館を理解する迄」と題する一文（『国士館百年

史』史料編上、四六五～四七二頁）に記されている。まずは、当初思っていた国士館のイメージについて、

出来た当時の国士館の噂は、全く設立者の趣旨とは天地の差でありまして、なんでも壮士を養成するところだらうといふことに、附近の人々は噂をそのまゝ、肯定して怪しみもせなかつたのであります。従て誰も強いて近寄らうとせず、どちらかといへば敬して遠ざけるといふ主義で居たやうであります。

と述べている。しかし、国士館から農商補習夜間塾の講義依頼があり、実際に国士館を訪れ、学生と接するにしがたい「聞く」と見るとは正反対」であつたとして、驚きを含めて次のように語っている。

元来石井君（筆者註―澄之助、国士館商業学校主事）が私を目掛けて補習学校に講義を受持つてくれと頼みにきた経路が未だに判らぬのであります。こんな縁故で、私が追々国士館に接近するの機会を得、その後時日を経過するに従つて、国士館内部のことも少しづつ、判るやうになつて見ると、この附近の人々の噂や、私が当初考へて居た国士館なるもの



1926（大正15）年2月2日 商業学校創立相談会
（後列左より5人目が大場信續、6人目が柴田徳次郎）

とが、寧ろ正反対であるのに驚き且つ喜んだやうなわけであります。いかにも国士館の学生は破れ袴や破れ洋服で、決してきれいではありません。(中略) 国士館の学生のきれいでないのは、一に質実といふ主義から発足したものであるやうであります。現にこれは学生ばかりでなく、職員や役員達に至るまで同一であります。(中略) 私は附近の人々の風説や、自分一己の想像から、国士館といへば、壮士——豪傑——酒と、こんな風に聯想して、定めて酒呑童子のやうな人が多いだらうと思ふて居ましたのに、事実が全く反対なのに驚きもし、又感心もしたのであります。(中略) こんな風に眼や耳で、機会ある毎に国士館なるものが漸次理解さる、やうになりましたと共に、柴田館長やその他の諸君と接近する機会の度重なるに従ひ、国士館の精神方面に就ても、次第に理解がつきまして、理解すればするほど世間の想像と相反して、その精神たるや、至つて健全のものであり、又今日の時勢では、当にさうなくてはならぬものと痛感するやうになつたのであります。

また、信續の校長就任は国士館側も歓迎している。国

士館館長柴田徳次郎は、国士館支援者である麻生太吉へ商業学校創設の経緯を伝えた書簡(『国士館百年史』史料編上、四五六―四五七頁)のなかで「校長には宮内省農務課長農学士大場信續氏とて四十数代当世田谷の名家にて徳川時代の代官、現在も荏原郡一の大地主(五十三才)一寸野田翁(筆者註―卯太郎)の如き人物に御座候」と記している。

一九二六年四月、授業を開始した商業学校であったが、準備期間が短かつたこともあり、当初の生徒数は定員に満たず、また、生徒は職業に従事しながら学ぶために、休暇期間にも課題が生じた。そこで一九二六年六月一日に、前期・後期に入学可能な二期制の導入と長期休暇の短期化、選科生の設置などを骨子とした学則変更を申請した。

その後は時代の要請もあり、一九二七(昭和二)年二月一五日には、高等程度の学校などへの進学者が増加したことによる学科課程の改善や受験料の減額を主な要旨とした学則改正を申請している。さらに、一九二八(昭和三)年一二月には、青年訓練所規定第八条に基づく教練時間などの学科課程変更のため学則改正願を提出し、翌一九二九(昭和四)年一月一六日に認可を得た。これにより商業学校の卒業生は、徴兵猶予と在営年限短縮の



1940（昭和15）年頃 国士館商業学校・中学校校舎夜景

特典を得ることとなった。さらに、急増する就学希望者に対応するため、一九三二（昭和七）年一〇月二六日、修業年限を五年と改め、入学を尋常小学校卒業程度満一二歳に引き下げ、収容定員を五〇〇人とする学則改正願を申請し、同年一二月二七日に認可を得た。

このようにほぼ順調に歩みを進めていった商業学校は、一九三六（昭和一一）年に一〇周年を迎えた。それを記念して同年一〇月四日に商業学校主事関野直次の編集で『商業学校十年小史』が刊行された。巻頭の「祝辞」において、信続の学友で、東京帝国大学教授（農学博士）であり、世田谷区教育会長の佐藤寛次が、信続の人となりについて述べている。

氏は豊富な常識を有つた円満なる人格者であり、又一郷の信望を集めた郷土の先輩であることは、私が特に茲に贅するまでもないことであるが、就中一言したいのは、氏の性格の極めて恬淡なことである、氏は名誉の念にも淡く、利欲の情にも甚だ薄い、その名利に淡泊なことは、氏が官途を退くまで、一技術官の職に安んじて他の榮達を顧みなかつたのでも知ることができよう。氏がこの学校の校長として、十年一日の如く孜々として子弟の育成に没頭して

るのも、全く氏の信念の一つの発露であつて、一身の名声利得を考慮に置くものでないことは、私の熟知する所である。

こうした賛辞は他からも寄せられており、信續もまた自分の信念について、同誌「十周年を顧みて」にて次のように示している。

恰も祖先がこの土を培ひ育み来つたやうに、私も微力の限りを郷土の為に捧ぐる事は、祖先に対し郷土に対して当然の報恩、天与の義務と思つてゐる。然しそれが私の器であるか否かは知らず、少くとも私一箇はしかく信じてゐるのである。私が今現に幾多の公共事業に微力を捧げて、日々多忙の日を送つてをるのも、結局この信念に基く行動に外ならないのである。但し私は凡そ議員と称すべき公職の何物にも席を列してゐないといふのは、さういふ方面には自然人才が多いからであつて、又自らその器でないことをも知つてゐるからである。要するに私は飽くまで側面的な、質素な方向に向つて、郷土を培ひ、郷土の為に尽して行かうといふのが、私の主義でもあり方針でもある。私は名誉や利益に対して寸豪の

欲望もない、唯この郷土愛の信念に始終するのが私の生命である。私が学校長として語り得るものは唯この一事であると思つてゐる。

本校は示上の如き私の主義方針の下にあるのであるから、その経営乃至教育方針も飽くまで質実堅剛に郷土の発展向上を主眼として、主として地方の子弟、それも多くは農商家の子弟をして、家業の傍簡便に自由に修学し得しむることの以外には、一步も踏出してをらぬ。故に甚だ質素な、甚だ平凡な、一面から言へばあまりに見映えのせぬ学校ではあるが、これが私の主義であり方針であり、又この学校の存在する所以でもあるのである。

一九四一（昭和一六）年一〇月、信續は校長の任を柴田徳次郎に譲つてゐる。ただし、その後も地域、そして青少年への援助は生涯を通して続けていった。

一方、信續が組合長を務める世田谷信用販売購買組合は、一九五一（昭和二六）年六月に公布・施行された信用金庫法に伴い、翌一九五二（昭和二七）年七月に世田谷信用金庫となった。信續は生涯にわたり組合長を務めたが、最後まで「金を出しても口は出さない」態度を貫いた。

一九五四（昭和二九）年五月三日、信續に緑綬褒章が授与された。御年七五歳の折の榮譽であった。これは宮内省林野局に勤めながら、地域振興のため、産業組合精神に基づく世田谷信用販売購買組合を創設し、以来三三年間、組合長および理事長を任じ、併せて地域内中小企業の育成と地域住民の生活向上への尽力が認められたのである。

次いで、一九六二（昭和三七）年一〇月一日の世田谷区制三〇周年記念式典において、世田谷区で最初の「名誉区民」の称号が授与された。これは、第三回定例区議会で決議され、実施された名誉区民条例による表彰で、区政の発展に著しい功績のあった区民に贈られる称号であった。永い間ひたすら郷土の発展を願い、力を尽くしてきた身として「最高の贈り物」と喜んだという。信續の性格からして先の緑綬褒章よりこちらの方が嬉しかったのではなからうか。

世田谷名誉区民第一号の称号を受ける頃までは、元氣でいた信續であったが、やはり寄る年波からか、その後は体調をくずし、一九六四（昭和三九）年一〇月七日、黄泉の客となった。享年八五歳の大往生であった。

戦後、国士館では、勤労青年にも門戸を開くべく、一九四八（昭和二三）年に至徳高等学校定時制商業科

（新制四年制）を、一九五三（昭和二八）年に国士館短期大学経済科二部（二年制）を設置している。両校は共に夜間定時制で、昼間に職業をもつ者が多く入学している。こうした地域住民を支える姿勢は、戦前の国士館商業学校、ひいては大場信續の精神が受け継がれたものと言えるのではないだろうか。